

フォーカスとデーモス

小林 功

はじめに

ビザンツ帝国には国制上の権利を持つ存在として、元老院と軍、そして民衆がいたとされる。このうち民衆は、7世紀以降はその政治的影響力がきわめて限定的になっていたとされることが多い。6世紀のユスティニアヌス1世(在位527－565年)時代に起きた有名な「ニカの反乱」(532年)も、古代的な民主政治、あるいは市民による直接的な政治参加が国家によって否定されたことを象徴すると考えられることがある⁽¹⁾。

しかし6－7世紀のビザンツ帝国で、民衆の政治参加の機会が急速に制限された、という言説に関しては再検討が必要である。かかる言説の背後には、古代末期のいわゆる後期ローマ帝国から、ビザンツ帝国への変化の画期としての7世紀、という見解があるからである⁽²⁾。確かに7世紀がビザンツ帝国にとって大きな変化の時代だったことは事実であろう。しかしそうした変化を過度に強調することには問題が残る。近年の研究状況からも示唆されるように、後期ローマ帝国からビザンツ帝国への変化の中には、比較的長期間をかけて漸進的に進行したものも多い。またこの時期を通じて本質的な変化を経験しなかった要素も存在する⁽³⁾。

ビザンツ帝国において民衆の直接的な政治参加を考える際に念頭に浮かぶのは、デーモスの存在である。馬車競技のファンクラブであったデーモスが、皇帝ら政府首脳との直接的な政治対話の主体となったという議論、また彼らや元老院・軍による歓呼が、皇帝の即位儀礼で大きな意味を持っていたこともよく知られている⁽⁴⁾。しかしデーモスの果たす政治的な役割は「ニカの反乱」、あるいはヘラクレイオス(在位610－641年)没後の政治的混乱の中で一定の意

(1) 例えば井上浩一『生き残った帝国ビザンティン』講談社現代新書(以下、井上『ビザンティン』と略)、1990年、83-94頁。

(2) 7世紀のビザンツ帝国に関する研究としては、J. F. Haldon, *Byzantium in the seventh century: the transformation of a culture*, Cambridge, 1997² などがある。

(3) cf. 拙稿「六－七世紀ビザンツ帝国における都市景観の変化——『『ポリス』から『カストロン』へ』説の再検討——」『西洋史学』206、2002年、1-16頁。

(4) 渡辺金一『コンスタンティノープル千年——革命劇場——』岩波新書、1985年；拙稿「二つの「ローマ皇帝」像——バシレイオス一世とミカエル三世——」歴史学研究会編『幻影のローマ——〈伝統〉の継承とイメージの変容』青木書店、2006年、181-217頁。

味を果たしつつも、以降は政治的重要性を喪失し、8世紀以降は皇帝の即位儀礼で歓呼を行うための一種の官僚へと変質していったとされる。だがかかる見解に関しては再検討の余地がある。

ゆえに本稿では、6-7世紀のコンスタンティノープルのデーモスに着目し、この時期のビザンツ国家において民衆がどのような形で、そしてどの程度政治に参加していたのかに関して分析を行う。この問題についてはキャメロンの研究が画期となり、政治的影響力を限定的に理解する見解が主流である。なお、分析の対象として本稿ではフォーカス(在位602-610年)の治世に着目する。その理由としては、それ以降の事例と比較して資料が豊富で検討が行いやすいことがあげられる。

現在もなお、フォーカス帝は暗愚な皇帝とされることが多い。かかる否定的な評価は、資料の持つ性向が大きく影響している。フォーカス帝について記述がある同時代資料としては、テオフルクトス=シモカッテスの『年代記』⁽⁸⁾と、『復活祭年代記』⁽⁹⁾が挙げられる。前者は主にフォーカスによって倒されたマウリキオス(在位582-602年)の治世について扱っており、マウリキオス帝に非常に好意的である。一方628年までを扱った『復活祭年代記』は、ヘラクレイオス帝に対して好意的な報告となっている。

これらの年代記がマウリキオス帝、あるいはヘラクレイオス帝に対して好意的であることが、フォーカス帝評価に決定的な意味を持った。すなわちマウリキオス帝やヘラクレイオス帝の功績を強調するため、フォーカス帝は徹底して暗愚な人物とされたのである。しかし近年ではかかるフォーカス像の再検討を迫る見解も現われている。⁽¹⁰⁾

これ以外のギリシア語資料としては、7世紀前半-中盤に成立したアンティオキアのヨハネスによる『年代記』⁽¹¹⁾があげられる。この資料は上述した二年代記のようなバイアスが少なく、フォーカス帝の治世の評価に関しては大きな意味を持つ資料である。

ギリシア語以外の資料としては、セベオスの『年代記』(アルメニア語)⁽¹²⁾やテル・マーレの偽ディオニュシオス(シリア語)⁽¹³⁾、ニキウのヨハネの『年代記』⁽¹⁴⁾などが利用できる。ただしこれらの資料は同時代資料とはいいがたい上、記述も限定的である。

(5) 井上浩『ビザンツ皇妃列伝——憧れの都に咲いた花——』筑摩書店、1996年(以下、井上『皇妃列伝』と略)、43-104頁。

(6) 井上『ビザンティン』、14-16、127-128頁。

(7) Al. Cameron, *Circus Factions: Blues and Greens at Rome and Byzantium*, Oxford, 1976.

(8) C. de Boor(ed.), *Theophylacti Simocatae historiae*, Leipzig, 1887(以下、*ThS*と略)。

(9) L. Dindorf(ed.), *Chronicon Paschale*, Bonn, 1832.

(10) D. M. Olster, *The Politics of Usurpation in the seventh century: Rhetoric and Revolution in Byzantium*, Amsterdam, 1993(以下、Olsterと略)。

(11) U. Roberto(ed.), *Ioannis Antiocheni Fragmenta ex Historia Chronica*, Berlin, 2005(以下、*IA*と略)。

(12) R. W. Thomson(tr.), *The Armenian History attributed to Sebeos*, Liverpool, 1999.

(13) Pseudo-Dionysius of Tel-Mahrē, *Secular History*, in: A. Palmer(tr.), *The Seventh Century in the West-Syrian Chronicles*, Liverpool, 1993, pp. 85-221.

(14) R. H. Charles(tr.), *The Chronicle of John (c. 690 A. D.), Coptic Bishop of Nikiu*, London, 1916(以下、*Nik.*と略)。

フォーカス即位時のデーモス

テオフュラクトス＝シモカッテスによると、コンスタンティノープルの市民やデーモスが市内で騒擾を起こし、マウリキオスとその家族はコンスタンティノープルからの逃亡を余儀なくされた。その後、マウリキオス帝期の有力者でユスティニアヌス1世の一族でもあったゲルマノス⁽¹⁵⁾を推挙するデーモスの「青組」に対して、「緑組」がそれを拒否し、コンスタンティノープル郊外のヘブドモンでフォーカスが即位儀礼を行う際に大きな役割を果たしたとしている⁽¹⁶⁾。しかしこうした記述には、デーモスにマウリキオス失脚の責任を押しつけようとするテオフュラクトスの作為が看取できる⁽¹⁷⁾。

実際にはマウリキオス帝は以前から、軍や元老院議員、そして民衆など、多くの人々の不満を買っていた。現在では評価の高いマウリキオスであるが、当時は彼の政策や強欲さが不満的となっていた。治世末期には多くの勢力が皇帝に対して反感を持つようになっており、ドナウ軍団の蜂起はその一端に過ぎなかった。

こうした点を想起すれば、軍の蜂起に乗じるような形で元老院議員もマウリキオスに対する陰謀を企てていた可能性が想定できる。そしてテオフュラクトスの言及を見る限りでも、ゲルマノスがマウリキオスの失脚に大きく関わっていたことが理解できる。ただし、反乱を起こしたドナウ軍団の動向が決定的な意味を持っていたことは否定できない。アンティオキアのヨハネスが示唆するように⁽¹⁸⁾、反乱軍のコンスタンティノープル接近に加え、市内でもゲルマノスらによる陰謀の動きが明らかになり、その双方を抑え込む（あるいは説得する）ことが不可能になったことを悟り、マウリキオスは逃亡を余儀なくされたのである。

では、コンスタンティノープルの市民やデーモスはマウリキオスの失脚にどの程度関与していたのであろうか。テオフュラクトスの報告⁽¹⁹⁾を見ても、市民やデーモスが主体的にマウリキオスの打倒に動いたことは看取できない。市民やデーモスが行っているのはヘブドモン・ヒッポドロームにおける皇帝に対する歓呼という、皇帝の即位儀礼に不可欠な要素への参加に過ぎない。市民やデーモスは軍や元老院議員らの動きに便乗して騒擾を起こした感が強く、政情には大きな影響を与えていない。また彼らの行動自体も主体的とは言えない。

しかしこれは、コンスタンティノープル市民・デーモスが主体的な活動をまったく行っていなかったことを示すわけではない。ドナウ軍団への説得が不調に終わりつつある時期、マウリキオスは「あたかも身の破滅の心配など忘れたかのように何回も馬車競技を開催して平常心を

(15) J. R. Martindale(ed.), *Prosopography of the Later Roman Empire III: A.D. 527-641*, 2 vols, Cambridge, 1992. (Germanus II)

(16) *ThS*, viii. 9. 13-viii. 10. 1.

(17) Olster, pp. 49-65.

(18) *IA* pp. 548-550.

(19) *ThS*, viii. 9. 9.

取り繕い、競技場にいる人々に対しては伝令を通じて、兵士たちの無意味な騒擾に気を悩ませるべきではないと知らせた⁽²⁰⁾」。ここからは、マウリキオス帝が首都における市民の行動を不安要因として危惧していたこと、そしてデーモスとの対話を通じて、市民たちの考えをある程度推し量ろうとしていたことがある程度示唆される。またフォーカス支持を決定した「緑組」はヘブドモンまで出向いてフォーカスの歓呼を行っている⁽²¹⁾。さらにテオフュラクトスの報告⁽²²⁾を信じるならば、デーモスがヘブドモンでの即位儀礼実施を主導した。

以上要するに、コンスタンティノーブル市民・デーモスは、軍の動きに完全に従属して行動をとっていたわけではない。彼らはある程度主体的に状況を判断し、一定の軍事力を持ち、そして彼ら自身で支持する勢力を選択していた。

おわりに

コンスタンティノーブル市民・デーモスは、フォーカス帝期の政治が混乱した状況下では、ある程度主体的で独立した政治勢力として行動をとっていた。ただ彼らの行動が政局に大きな影響を与えたとは言いがたい。大きな影響力を持っていたのは軍と元老院議員、特に軍だった。

一方ヘラクレイオス帝期以降、コンスタンティノーブル市民・デーモスの政治的影響力が完全に失墜し、失われたとも言いがたい。政情が混乱している時期など、市民やデーモスが何らかの形で関与している例は7世紀を通じて繰り返される。もっとも有名なのは641年のヘラクレイオス帝没後の混乱⁽²³⁾であるが、661年にコンスタンス2世（在位641－668年）がコンスタンティノーブルからイタリア・シチリア島へ向けて出立した時の市民たちの反応⁽²⁴⁾なども挙げられる。

要するに、コンスタンティノーブル市民・デーモスによる政治への限定的な関与という状況は7世紀初頭に特有のものではない。それゆえ彼らの行動を「古代的な民主主義の伝統の残滓」と考えるのは適切ではない。むしろ8世紀以降も存続していく、ビザンツ国家の一要素をなすものと考えべきではないだろうか。確かに8世紀中盤以降、コンスタンティノーブルの市民やデーモスが限定的にせよ政治動向に関与する事例はほとんど確認できない。しかしコンスタンティノーブル市民が皇帝の即位儀礼に不可欠の要素たり続けるということに、彼らの潜在的な政治力を想定できよう。

確かに7世紀のコンスタンティノーブル市民、そしてデーモスの政治的影響力は限定的だった。しかしその力は7世紀に終焉を迎えたわけではない。デーモスは確かに「ローマ帝国とい

(20) *ThS*, viii. 7. 8.

(21) *ThS*, viii. 10. 5.

(22) *ThS*, viii. 10. 1.

(23) Theophanes, *Chronographia*, Leipzig, 1883-85 (以下、Theoph. と略), pp. 341-342, *Nik.* ch. 27-32; 井上『皇紀列伝』、90-102頁。

(24) Theoph. p. 348.

う建前を維持するために、雇われていた『市民』⁽²⁵⁾という役割を果たしていた。他方でコンスタンティノープルの民衆は帝国の安定にとって不可欠の存在でもあった。コンスタンティノープルという都市に住む人々やさまざまな集団——もちろんこれには民衆だけでなく、元老院議員なども含まれるが——との関係が脆弱な皇帝は、場合によっては帝位や生命を失う場合もあるのだ。そう、マウリキオスのように。

(25) 井上『ビザンティン』、16頁。